



MTNA エグゼクティブ・ディレクター & CEO の Gary L. Ingle 氏(左)、ジーナ・バックアウワー国際コンクール創業者 & ディレクターの Paul Pollei 氏(中央)、当協会評議員・事務局次長の正木麻里子氏(右)。

MTNA 2009 National Conference リポート

123 年続く伝統行事で、新しい音楽教育の提案

3月28日(土)～4月1日(水)ジョージア州アトランタにて、第123回 MTNA National Conference が開催された。100を超えるプレゼンテーション(講座)、コンサート、マスタークラス、商品展示会が行われ、約1800名の参加者で大賑わいとなった。その様子をレポートする。

(Report: 菅野恵理子)

今大会テーマの一つ 「コラボレーション」

講座の内容は、実践的な指のテクニック紹介から、ITを活用したレッスン提案、グループレッスン、大人のレッスン、アンサンブル、コーチング、即興、医学的サポートに至るまで、実に多岐に渡る。中でも、「group teaching」[technology]「collaborative performance」3つのプログラムが特別に組まれていた。そのうちの1つ「collaborative performance」では、声楽家や伴奏ピアニストによる講座がいくつか行われた。声楽家 Donald George 教授とピアニスト Lucy Mauro 教授による講座では、歌詞に込められている意味とその表現方法などに言及。参加者と一緒に詩を読みながら、いかに「歌うように」音楽的表現を創り上げていくかというプロセス



Donald George 教授

が紹介された。デモンストレーションで歌った、シューベルト『水車小屋の乙女』は特に秀逸。またアンサンブル講座では、他楽器奏者の呼吸や音程にと

う合わせるか、等が紹介された。MTNAホームページでは室内楽中級レパートリーの曲目検索ができるようになっていて、米国でもアンサンブル早期教育に力を入れているようだ。

「モチベーション」と「指のテクニック」

こうした特別プログラムとは別に、「いかに生徒のモチベーションを上げるか」といった普遍的なテーマとしては、連日多くの受講者が詰め掛けた。レッスン現場のケーススタディとして、Bonnie Blanchard 先生の講座には多くのヒントがあった。まずやる気のない生徒や集中力のない生徒などの事例を紹介。「言い訳の多い生徒には、こんなグッズはいかが？」と面白グッズを矢継ぎ早に取り出しては、会場の

Bonnie
Blanchard
先生。



爆笑を誘った。見事な小物使いを披露する一方で、「生徒は自分が望む通りになる。上達してほしいけれど、『絶対に上達する』と、相手に高い水準を望むこと」先生は服装・態度・言葉遣いなど、全てにおいてプロフェッショナルであることといったメッセージに、聴衆は大きく頷いていた。日本からいらしたピティナ会員の竹内由利子先生は「色々なものを使って、音楽をやる

気持ちにさせる、子供をいかに楽しませるかという点で、特に Bonnie 先生は印象深かったですね」とコメントを下さった。また指のテクニックの講座も常に満席。Mary Moran 女史よる Taubman Approach では、身体機能の理論を踏まえた正しい姿勢や指のポジショニングを紹介。また Catherine Rollin 女史による講座では、バツハやドビュッシー『喜びの鳥』冒頭等を例に挙げながら、正しい運指法で音楽的表現に結びつけるにはどうしたらよいかという、テクニックと芸術性の同時追求に注目が集まった。

アメリカでは指の負傷・故障が多いそうだが、楽器演奏と身体機能に関する学術的研究も進んでおり、音楽専門のドクターもいる。NY 大学 Kathleen Riley 教授と、カナダの音楽家専門クリニックを務める John Chong 氏による講座では、専用映像機器でのモニタリングを推奨。生徒や自分自身が手を傷めた経験のある参加者から盛んに質問が寄せられた。

現場指導者と研究者を結ぶ MTNA

カンファレンス全体を通しての印象は、現場で生まれた工夫やアイデアだけでなく、理論研究も進んでおり、それが指導者にも情報共有される機会が多いこと。MTNA では今年9月より、『Journal』を発刊予定。公募で学術論文を募り、専門委員会の選考を経て、四半期に一度オンラインで発表していくそうだ。また、



現場と研究分野を結ぶ存在であるといえるだろう。その他 MTNA には音楽教育者・学習者・関係者を助成するファンドもあり、毎年数十に及ぶ応募の中から選ばれた数名がサポートを受ける。こうして全体の歯車となって音楽教育界をリードしていく、それが MTNA が百年以上担ってきた役割だろう。

そして、その原動力となっているのは「とにかく、音楽は楽しませよう」という肩の力の抜けたポジティブさ。最終日前夜に行われたゲスト・アーティスト Olga Kern のコンサートでは、重厚なプログラムをダイナミックに弾き、会場総立ちのスタンディング・オベーション！経済危機の最中とはいえ、やはり米国は底抜けに明るかった。

次回は 2010 年 3 月 20 日〜24 日、ニューヨーク州アルバカーキにて開催される予定。生誕二百年を迎えるショパンもテーマの一つに。詳しくは www.mtna.org まで。



MTNAから学ぶ

アメリカには、「MTNA」という、創立133年・会員数約25,000人の音楽指導者の団体がある。全日本ピアノ指導者協会の英語名称「PTNA」はMTNAを元に名づけられ、「ピティナ」という日本語読みを加えたものである。

MTNAでは、毎年3月、約100件の講座等のイベントを数日間に集約させた、大きなコンファレンスを開催している。今春、招待状をいただいたので、ピティナ本部事務局次長の正木麻里子に視察を依頼した。133年間も団体が存在し続けるには、何らかの革新を行い、ピティナに応用できる考え方や活動内容があるはずだと考えたからだ。

中でも、音楽科の大学生が音楽指導者になることをサポートするシステム（Collegiate Chapter）は、先進事例として新鮮である。まず教官（アドバイザー）との面接から始まり、コンクール運営のお手伝い、未就学児の音楽指導のインターン、MTNAの支部ミーティングへの参加など、アドバイザーのアイデアに従って、様々な体験の場が与えられる。

ピティナに目を転じると、例えば、横浜アンサンブルアソシエーション（代表：江崎光世先生）では、ステップで大学生のインターンを受け入れた実績がある。ステップでは多くのピアノ指導者がボランティアでご協力下さるが、強い意思を持って生徒を育てている指導者と運営の現場を共にすることで、ピアノ指導者という職業へのやりがいを実感し、モチベーションが高まるのである。

また、ピティナ本部事務局では、ピアノ指導者を志望する音大の卒業生に向けて、勤務期間2年という条件で、職員採用を始めている。全国のピアノ指導者をサポートする仕事が、社会経験ばかりでなく、多様なピアノ指導者像に触れる機会にもつながる。

以上の通り、単発的ではあるが、ピティナでも、ピアノ指導者を目指す学生を手助けする活動が始まっている。MTNAをさらに研究しつつ、学生がピアノ指導者になることを支援できる仕組みを、制度として作っていききたいものである。